

博士学位論文審査要旨

2018年6月21日

論文題目： 谷崎潤一郎と中国古典——受容の実態と軌跡——

学位申請者： 李 春草

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副 査： 文学研究科 教授 西川 貴子

副 査： 文学部 准教授 瀬崎 圭二

要 旨：

本論は〈試行錯誤の時代〉と称されることが多い大正期の谷崎潤一郎の文学を、中国古典の受容の実態に絞って考究した論考である。

第一章「少年谷崎の思想遍歴」では、就学期の谷崎が教師の薫陶を受けて儒家・道家思想と出会い、当時の陽明学ブームや「煩悶」の流行に対してとった態度を、作家以前の〈初期文章〉から明らかにした。本論の前提となる大切な論考ではあるが、「遍歴」という章題が示すように時代思潮に感化され動揺が見られる少年谷崎の考えを「思想」と位置づける論拠がほしい側面も残る。

第二章「麒麟論」は、儒家の徳性思想を魯国・衛国に植え付けようとして二度の挫折をした孔子の物語を『史記』の叙述と比較して論じたものである。谷崎の儒家思想に対する否定的な態度が道家思想との比較において際立たせられているとした。

第三章「人魚の嘆き」論では、従来指摘されてきた『清俗記聞』に加え新たに『板橋雑記』を、第四章「人間が猿になった話」論では数多い〈美人を拐かす猿〉譚から『唐代叢書』「白猿伝」を、それぞれの作品の素材として認定し、背景としての東洋、典拠と創作動機などの観点から作品論を試みた。両作は谷崎が中国へ旅立つ以前の作品であり、西洋崇拝からの変化の兆しが見える作品だった。

第五章「鮫人」論、第六章「鶴唳」における漢籍要素と東洋的詩情では、帰国後の作品を対象にして、西洋的要素と中国的要素の融合の実態や、漢籍要素の有り様を探った。「鮫人」では東西人魚伝説の形象と、「鶴唳」では『西湖佳話』『白氏文集』の表現と、それぞれ比較し、谷崎作品の特徴を論じた。終章「中国古典の受容と終焉」では二回目の中国旅行にも言及し、やがて谷崎が中国古典に関わる作品から撤退する経緯を示した。

学位申請者の出自を活かしたテーマ設定であり、比較文学的観点からの谷崎研究に付け加えられたことも多い。論文中で頻出する「支那趣味」「中国古典」の言葉の使い分けに曖昧さが残ること、各論の積み重ねである論文全体の体系が不十分であることなど、課題を残しているものの、言語の壁を乗り越えて真摯に谷崎文学に取り組み成果をあげたことは評価できる。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2018年6月21日

論文題目： 谷崎潤一郎と中国古典——受容の実態と軌跡——

学位申請者： 李 春草

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副 査： 文学研究科 教授 西川 貴子

副 査： 文学部 准教授 瀬崎 圭二

要 旨：

上記審査委員3名は、2018年6月19日、午後4時から約2時間にわたり、扶桑館105教室において、公開で学位申請者に対して、口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、外国語（英語）についても、本論文の内容に関わる形で語学試験を行い、十分な学力のあることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目： 谷崎潤一郎と中国古典——受容の実態と軌跡——
氏名： 李 春草

要 旨：

谷崎は明治、大正、昭和にかけて五五年もの間作品を書き続けた〈三代の文豪〉と言われる。その生涯は一般的に明治・大正期と昭和期とに分けられている。明治・大正期の創作期間は昭和期の半分にも満たなかったが、谷崎の生涯において重要な意味を持っており決して見逃せない時期である。失敗作が多い試行錯誤の時代だったとされるが、この時代があったからこそ『昭和時代』への飛翔も成熟も可能だった」との秦恒平の指摘もある。これまでこの時期は、しばしば〈西洋かぶれ〉〈悪魔主義〉〈支那趣味〉などと様々なキーワードの下に語られたが、中国古典の受容は、〈支那趣味〉という言葉で片付けずに谷崎文学のもう一つの特徴として注目されるべきである。

少年時代に漢文を勉強し数多くの漢文古典をむさぼるように読み漁った谷崎にとって、漢文学は教養の一部となりその文学のよき土壌にもなっていた。谷崎が中国古典に取材した文章や作品は、既に文壇デビュー以前に見られる。例えば「道徳的観念と美的観念」(一九〇二・六)、「無題録」(一九〇三・九)、「文藝と道徳主義」(一九〇四・五)など。また文壇デビュー以後の「刺青」(一九一〇・一一)や「麒麟」(一九一〇・一二)、「人魚の嘆き」(一九一七・一)、「人間が猿になつた話」(一九一八・七)、「鮫人」(一九二〇・一、三～五、八～一〇)、「鶴唳」(一九二一・七)など明治から大正一〇年まであまた書かれていた。これらの作品は谷崎文学にどう位置付けられるか、中国古典の受容の実態を調べることは谷崎文学の歩みを把握するために重要な意味を持っている。

本論文では谷崎の少年時代の試作から一九二一年頃までの間に書かれた中国古典と関連のある作品を対象にそれぞれの典拠を掘り下げ、谷崎文学における中国古典の捉え方を考察した。谷崎の一九一八年の中国旅行を境目として第Ⅰ部と第Ⅱ部とに分けた。第一章から第四章までは第Ⅰ部で第五章と第六章は第Ⅱ部にあたる。

第一章では少年谷崎の思想遍歴を考察した。谷崎は少年時代に漢学塾で漢籍古典を勉強し、儒教復興の時代風潮や学校の先生の影響で、一時儒教特に陽明学に興味を持っていた。しかし家運の傾きによって自負と屈辱を同時に体験せざるをえなかった谷崎は、苦悶しカントやニーチェや荘子、仏典など数多くの哲学書や思想書を読み漁って精神的な救済を得ようとした。しかし、その結果として、谷崎はカント倫理学と儒家思想が「胸中に蟠れる煩悶に対して、懊悩に対しあまりに冷淡なり」と道徳主義に反抗し、文学への自覚が芽生えはじめた。この時期の谷崎の考えは文壇デビュー以後の創作にもつながっていく。例えば「麒麟」の題材及び儒家、道家への言及などは、谷崎の少年時代の読書経験に負うところが大きく思想的つながりも見られる。

第二章では谷崎潤一郎「麒麟」(「新思潮」一九一〇・一二)について論じた。「麒麟」は中国古典と関わって書かれた意味での第一作といえる。『論語』『史記』などの記録に基づき儒家の聖人・孔子と衛靈公の妃・南子との物語が書かれた。本章では中国古典における麒麟の記録から「麒麟」のイメージと孔子との関連を掘り下げその象徴性を明らかにした。「麒麟」と孔子に関する逸話に漂う悲劇的な色彩は小説全体の基調を生み物語の結末も暗示している。これは谷崎が小説のタイトルに選んだ理由とも考えられる。また中国古典において南子は孔子＝徳性に対して畏怖を感じたと描かれているが、谷崎の「麒麟」においては自ら徹底的に孔子＝徳性に挑戦しようとする肉体や欲望の代表者として描かれた。この相違こそが「麒麟」のモチーフの所在である。さ

らに南子、孔子、林類らの人物像から小説全体の構図を読み取ることができ、第一章で述べた谷崎の少年時代の思想との一致も見られた。

第三章では、谷崎潤一郎「人魚の嘆き」（『中央公論』一九一七・一）の舞台設定の意味と典拠を考察した。小説の舞台・南京はかつて江南地域の廓の町であり才子佳人の地としてよく知られていた。享樂の空間でありながらもそこにまつわる数々の伝説のヒロインたちの不運な身の上から、感傷的情緒も生じていた。谷崎がそこに舞台を設定したのは、放蕩や贅沢の限りを尽くした貴公子の登場に相応しく、また美しい人魚と遭遇して不思議な体験をした場所にも似つかわしい。さらに人魚と貴公子の物語の発展にもふさわしい場所である。主人公の境遇やその他の登場人物の人物像には清・余懷『板橋雜記』との関連が見られた。谷崎はこれらの中国的要素を取り入れる「鏤心刻骨の苦しみ」（『明治大正文学全集第三十五巻 谷崎潤一郎篇』解説）一九二八・二）を経て東洋的情緒にあふれた物語空間を作り上げることに成功した。このような空間は西洋人魚が持つ異質な美と神秘性を一層引き立て、貴公子にも読者にも強い刺激を与えた。また、舞台は東洋的であるが、そこに登場する人魚は、「ローレライ」伝説やワイルド「漁師とその魂」などの人魚伝説に描かれた女性のイメージと重なる、純然たる西洋女性として描かれた。このような人魚像は谷崎の西洋憧憬の象徴と見られる。彼女が茫茫たる海に消えたことは谷崎の西洋への接近の不可能性を意味する。

第四章では、「人間が猿になつた話」（『雄弁』一九一八・七）の典拠と創作動機を考察した。一九一八年の中国旅行直前に発表されたこの小説は、登場人物やストーリーの発展などにおいて中国の伝奇小説「白猿伝」との類似性が見られた。創作経緯については、中国旅行までの谷崎の読書行為と芥川龍之介との交流との関連性を明らかにした。谷崎は旅行準備の一環として漢籍の読書に取りかかり、その中で芥川を経由して『唐代叢書』を手に入れ「人間が猿になつた話」の素材である「白猿伝」を読んだと推測した。さらに「人間が猿になつた話」は、同年の芥川の小説「首を落とす話」（『新潮』一九一八・一）と「地獄変」（『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』一九一八・五・一～五・二二）と、同じスタイルを採ったり、内容の取り合わせが一致したりするなどの共通性から芥川を意識した可能性が考えられる。

第五章では、「鮫人」（『中央公論』一九二〇・一、三～五、八～一〇）の典拠とヒロイン林真珠の人物像、小説の構成やこの時期の谷崎の思想の変遷を考察した。まず中国の文献における記録から鮫人のイメージを明らかにした。鮫人とは海底で機織りをしており、泣くと真珠の涙を流す、性別不明な存在である。ここにヒロイン林真珠の人物像との類似性が見られる。林真珠は真珠という名前や性別不明といった特徴において中国の伝説上の鮫人との類似が見られるが、同時に妖艶な美貌によって男性たちを誘惑するところにローレライ伝説や「漁師とその魂」との関連も見られた。林真珠の人物像における東西要素の融合は、他の面にも見られる。例えばエビグラフの漢詩とその後の小説の展開と対立、東洋画へ転向した南と西洋画を描く服部という二人の芸術家の対立などである。「鮫人」は人魚を描いた作品として「人魚の嘆き」に続く二作目である。しかし「人魚の嘆き」の純然たる西洋人魚のイメージと違い、鮫人＝林真珠には西洋的要素もあるが、中国的要素が圧倒的に多く見られた。これは谷崎の東洋の開眼として見てもよからう。この思想的変遷の原因は、南と服部の対談から窺われた。つまり南が話した、中国旅行を通じて真の東洋を実感しその自然や芸術に深い感銘を覚えたことである。これは中国旅行後の谷崎の心境でもあり、その後の純く支那趣味の作品「鶴唳」の創作にもつながる。

第六章では、「鶴唳」（『中央公論』一九二一・七）に用いられた漢籍を明らかにした上で、小説と漢籍における鶴のイメージの異同を検討した。まず主人公靖之助の物語と宋・林和靖「梅妻鶴子」の逸話との類似性を指摘し、『西湖佳話』が典拠であることを明らかにした。「鶴唳」の典拠の一つと見られる「梅妻鶴子」の逸話は『西湖佳話』巻五「孤山隱蹟」に収録されている。その他、江南を愛し鶴を愛する点において靖之助は唐の詩人白樂天との共通性も見られた。白樂天と同じく靖之助は江南から鶴を連れて来て自邸に江南の風景を再現した。谷崎は早い時期から愛

読する白詩をしばしば創作に引用し、「鶴唳」にも白詩の影響が窺われた。しかし「鶴」のイメージにおいて、白詩の高潔な君子のイメージと違い、靖之助の鶴は支那少女と一体化された、東洋文化や東洋詩情の象徴だった。靖之助はこの少女と鶴を身近に置くことによって憧れの中国との接近を求めた。

また美貌や肉体美などを強調するこれまでの谷崎文学のヒロイン像と違い「鶴唳」のヒロイン＝支那少女はあくまで存在感の薄い、象徴的な存在である。中国旅行以前から谷崎は中国古典に取材し活用する能力を持っていたが、中国旅行を通じて真の東洋を認識し東洋藝術の真髓を理解したと同時に、東洋藝術の抽象的、暗示的、省略的といった精神と作家が持つべき創作的情熱との両立の難しさを自覚したために、以前のように自由に中国古典に素材を求めることができなくなった。東洋藝術への心酔と創作的情熱のアンバランスに悩まされた谷崎は、中国古典及び支那趣味に関する創作を諦めるしかなかった。中国という東洋を放棄した谷崎は、一九二三年の関東大震災をきっかけに関西に移住しもう一つの東洋——伝統的な日本を発見しようやく自分の文学の帰着点に辿り着いた。

本論は谷崎文学における中国古典の受容について考察した。一回目の中国旅行を境にそれ以前は素材を中心とする受容であるのに対して、それ以後は東洋藝術の精神を理解したことによって素材的な受容を超えて精神面の受容も見られる。各時期の受容の実態と作品のモチーフへの考察から谷崎文学の方向性が見え、帰着点までの歩みを明らかにした。